

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

家庭の悲劇：エウリピデス『アンドロマケ』考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 婚姻, 家庭, 正妻, 妾, 反スパルタ キーワード (En): 作成者: 丹下, 和彦 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006187

家庭の悲劇

——エウリピデス『アンドロマケ』考——

丹 下 和 彦

要 旨

他の悲劇作品同様、本篇もギリシアの古い伝承をその素材としている。しかしそこに描かれているのは、現代のわたしたちの周囲にもしばしば見られる日常風景、その中でも家庭内不和の物語である。ネオプトレモス家の正妻ヘルミオネと第二夫人アンドロマケとの女たちの葛藤が物語の筋をなすが、作者の意図は彼女らそれぞれの悲劇的人間像を構築することではない。題名となったアンドロマケも、またヘルミオネも劇の途中で舞台から姿を消してしまう。

一方、劇中に散見される激しいスパルタ批判は、この劇を政治色の濃いもの、時代背景を色濃く反映するものとの見方を生んだ。確かにそれは否定し難いけれども、本篇はしかし、いわゆるプロバガンタ劇でもない。これは、婚姻という最小の人間関係に端を発する日常次元の人間の家庭内悲劇を描いた作品である。

キーワード：婚姻、家庭、正妻、妾、反スパルタ

はじめに

本篇は上演年、同時上演作品、そして競演の審査結果、そのいずれも詳らかにしない。上演年は凡その推定がされているが、確定しない。後3世紀になって選定された“エウリピデス10選”には入っているが¹⁾、古来秀作との評判は聞かない。アレクサンドリア時代の古典文献学者アリストパネス（前257～前180年頃）が付けたとされるヒュポテシス（劇の粗筋の紹介文。古伝梗概と訳される）には“第二^{デウテロス}のもの”とある。デウテロスという語が二流作品という意味なのか、あるいは競演の第二等の意味なのか、あるいはまた時代区分で第二グループという意味なのか、いろいろに付度されているが、これまた確定しない。ただ二流作品と評価されてもそれを覆すだけの作品に内在する力、内容の充実度は、どうやら窺えないようにも思える。

ではこの作品はどのようなものと位置づけたらよいのであろうか。これまでも多くの評家がいろいろに解釈を試みてきている。Kitto はアンチ・スパルタの政治的意図を強調し、それを劇の統一テーマであるとする²⁾。Stevens はトロイア戦争を劇のメインテーマであるとする³⁾。Garzya は劇のテーマを担う主人公をヘルミオネとする⁴⁾。Erbse は劇のテーマを担う主人公は

アンドロマケであるとする⁵⁾。Conacher は、この劇はトラジック・ヒーローのいない劇であると言う⁶⁾。そして Storey は、争いと殺戮というこの劇の悲劇的結果をもたらす要因として、家庭内不和（それは各パートナーの婚姻のあり方に起因する）に着目する⁷⁾。

それぞれ問題点を剔抉しているが、しかしそれがそのまま本篇を総合的に捉えるものになっているとは言い難いように思われる。それではわたしたちはどう捉えたらよいのか。どう捉え得るだろうか。考察に入る前に、本篇の凡その粗筋をヒュポテシスを借りて述べておこう。本篇にはヒュポテシスが二つ付いている。先ほどのアリストパネスのそれとは別の、無名氏の手になるヒュポテシスのほうを借りる。

ネオプトレモスはトロイアでヘクトルの妻であったアンドロマケを戦利品として獲得し、彼女から子供を儲けた。その後メネラオスの娘ヘルミオネと結婚した。最初彼はアキレウスの死の償いをデルポイのアポロン神に求めたが、考え直し、神意を慰撫すべく再び神託所に赴いた。アンドロマケに嫉妬を禁じ得ぬ王女（ヘルミオネ）はアンドロマケ殺害の計画を立て、父メネラオスを呼び寄せた。アンドロマケは幼な子を密かに隠し、自らはテティスの神域に避難した。ところがメネラオスの配下の者が幼な子を見つけ出し、またアンドロマケを騙して避難所から連れ出した。彼らは二人とも血祭りに上げようとしたが、そこに姿を現わしたペレウスに阻まれた。そこでメネラオスはスパルタへ帰り、ヘルミオネはネオプトレモスの帰宅を怖れて（自らの行為を）悔んだ。そこへオレステスが現われ、彼女を説得して連れ出し、ネオプトレモスに対しては陰謀をたくらんだ。その遺体が運ばれてくる。それにペレウスが涙を注ごうとする折しも、（女神）テティスが顕現し、遺体をデルポイに埋葬するようにと、またアンドロマケは子供ともどもモロッソス人の許へ送るように、そしてペレウス自身は不死の身の境涯を授かろうと言った。〔ペレウスはそれを受け入れ、至福の人々の島に住んだ。〕

劇の場はプティア⁸⁾のネオプトレモスの館の前となっている。

1. 女の争い

本篇は概ね三つの場から成り立つと見てよい⁹⁾。まずアンドロマケを中心に展開する場、次にヘルミオネが中心となる場、そしてネオプトレモスの死に関わる場である。この三人は第二夫人、正妻、そしてその夫という関係にある。これだけでも劇は問題含みの展開になりそうである。加えてアンドロマケは、かつてトロイアでヘクトルの妻であり、夫の死後は夫を殺害したアキレウスの息子であるネオプトレモスの側女に身を落したという経緯がある。またヘルミ

オネのほうは、ネオプトレモスに嫁す前、従兄のオレステスと許嫁の間柄だった。そのオレステスはのちにドドナへの旅の途次このプティアに立ち寄って、ヘルミオネをその願いどおりスパルタの実家へ連れ帰る役割りを担う。ネオプトレモスの死を嘆く祖父ペレウスは、かつて女神テティスの連れ合いであったが、劇の最後にデア・エクス・マキナとして顕現したテティスと再会し、彼女から死後は神となりテティスとともに暮すことになることを約束される。

登場する人物はそれぞれ新旧二重の婚姻関係で結ばれている。そして各人が旧い婚姻関係を引き摺りつつ、いま新しい婚姻関係でまた結ばれている¹⁰⁾。つまり彼らは婚姻、そしてそれによって成立する家庭、家というごくありふれた日常的な人間生活レヴェルにあることがまず確認されるのである。ギリシア悲劇の登場人物は、凡そみな家というしがらみに縛られて生きている。名家であれば名家であるゆえの重圧に押され、個を殺して生きることを求められる。アイスキュロスの『オレスティア』におけるオレステスがそうである。また他家から入った嫁は、しかも他国からの余所者は、婚家の、あるいは周囲の人間の無理解に苛まれる。エウリピデスが描く『メデア』のメデアがそうである。一方、個を殺し切れない人間が、安定した社会を構成する基本単位たる家を破壊に導く。エウリピデス作『ヒッポリュトス』のパイドラがこれに当たる。殺戮や争闘が家庭の不和から始まる場合もあれば、逆にそれが家庭に及んできて家庭が破滅させられてしまう場合もある。

いま本篇の場合、プティアのネオプトレモスの家を構成するのはネオプトレモスとヘルミオネ夫婦である。二人に子供はいない（ヘルミオネは石女^{うまづめ}と表現されている）。ネオプトレモスには第二夫人アンドロマケ^{ウマケ}がいて、正妻のヘルミオネと同じ屋根の下に暮している。トロイア戦争で戦利品として獲得してきた奴隷である。ヘルミオネは正妻としての立場から、この余所者の奴隷女を激しく非難する、「そんなこと（近親相姦という夷狄の風習）はこの国へ持ち込まないでもらいたい。だって／一人の男が二人の女を禦すというのは、けっして良いことではないから。／いいえ、家庭内を面倒なく過そうと思う者は、／愛する結婚相手一人だけを見つめていくことに満足するもの」（177～180行）と。

これは至極もつともな言い分である。言外にはこのような家庭状況を作り出した夫メネラオスへの非難も含意されよう。あるいはこうした状況を黙認する社会慣習に対する抗議の意志も。以下、彼女が取る行動もけっして不当なものとは言えないことになる。しかも第二夫人アンドロマケとのあいだには男の子モロソスが生まれている。当然ヘルミオネとしては面白くない。愛のライヴァル・アンドロマケへの嫉妬もさることながら、嫡子なしでは正妻の地位も安泰ではなくなる。立場が逆転して自分のほうが家から追放されるかもしれない。憎しみが口をついて出る、「おまえは戦利品で奴隷の分際でありながら／このわたしを追い出して、この家に乗っ取ろうという／魂胆。わたしはおまえの葉のおかげで夫から疎まれ、／このお腹はおまえのせいで石女^{うまづめ}となりはてた」（155～158行）。

元来彼女はスパルタ王家の王女である。その出自への誇りもあろう。アンドロマケもトロイア王家の跡取り息子の嫁という高い身分であったが、いまは零落して一介の奴隷女である。ヘルミオネの暴慢は止るところを知らない。彼女は実家から父親メネラオスを助っ人に呼ぶまでして、アンドロマケ母子を排除しようとする。「女心とはよくよく嫉妬深いもの。／結婚の競争相手にはいつも底意地悪く当たるもの」(181～182行)と、プティアの地の女性たちからなる合唱隊の長が言うとおりである。

一方、アンドロマケは主人ネオプトレモスの庇護を受けてはいるが、奴隷にすぎない身の上はけっして安全なものではない。しかもいま、頼りとするネオプトレモスはデルポイへ旅をしていて留守である。だからこそ身の危険を感じた彼女は、家を出てテティス女神の社に身を寄せている。

奴隷でありまた異邦人であるアンドロマケであるが、しかしその心根、人間性の点においては女主人ヘルミオネのそれをはるかに凌ぐ。彼女にはヘルミオネにはない知性と分別が備わっている(νοῦς, σὺφροσύνη, σοφία, φρόνησις という語がその言辞様態に充てられている。いずれも知や分別を意味する語である)。また妻そして女としての^{フレター}徳(ἀρετή)も強調される(たとえば208行)。さらには人生経験の差もある。ヘルミオネの頑是無さ、精神の未熟さがアンドロマケから「若い」と指摘され、「若さは悪」(184行)と決めつけられる(この二人に、エレクトラ vs. クリュタイメストラと同じ善女 vs. 悪女という対立構造を立てる見方もある¹¹⁾)。

アンドロマケの心はいまだに亡き夫ヘクトルの上にある。敗戦によって、その運命は夫を殺した男の息子の側女へと変転した。苛酷な境遇の中で、その身の安寧は主人ネオプトレモスに委ねられながら、亡夫への愛が心中から消えることはない。そしてその身を生かしている唯一の理由は新しく生まれた子供である。「プティアの地へ着いたあと、／ヘクトルを殺した男(の息子)と契りを結びました。／生きていて何の楽しみがありません。何を目安にすればよいのです。／いまの状況でしょうか。それとも過ぎ去ったの上でしょうか。／その子一人がわたしの人生に残された希望でした」(402～406行)という述懐が現在の彼女の姿を過不足なく言い表わしている。

ネオプトレモス家を二分するこの女たちの争いは、結局正妻ヘルミオネの負けに終わる。アンドロマケ母子の排除は失敗するのである。最初は父メネラオスの援助を得たヘルミオネ側の攻勢で子供を人質に取られ、アンドロマケはテティスの社の聖域から引き出されることになる。そこへネオプトレモスの祖父ペレウスが駆けつけ、メネラオス、ヘルミオネ父娘の暴威を阻止する。メネラオスは娘を見捨ててスパルタへ帰って行く。ヘルミオネは後楯を失って孤立することになる。

愛人を家庭に入れた夫は妻から報復を受け、制裁されるのが通例である。アガメムノンはカッサンドラをトロイアから連れ帰ったために、妻クリュタイメストラの怒りを買って、謀殺され

た（アイスキュロス『アガメムノン』）。ヘラクレスは愛人イオレのために妻ディアネイラの不信を買い、結果的に毒殺されることになった（ソポクレス『トラキスの女たち』）。しかしいまヘルミオネの怒りは夫ネオプトレモスには向けられていない。それは専らアンドロマケに集中して向けられている。この点が、彼女がクリュタイムストラやディアネイラと異なるところである。つまり劇の筋を運んでいくのは、正妻と妾という二人の女の争いそのものである。この劇はこうした二人の女の争いの劇であって、どちらか一人の女のそうした境遇に置かれた身の上を嘆き苦しむ姿を描く劇、苦しんだ拳句にそうした境遇を作り出した男への報復（殺害）の物語ではないのである。

ヘルミオネは第4エペイソディオンの末尾1008行で退場したあと、もう舞台に戻ることはない。アンドロマケはそれよりも早く第3エペイソディオンの末尾765行で退場し、姿を消す¹²⁾。彼女は劇にその名前を与えながら、劇全体を統括するトラジック・ヒーローとしては多分にその存在感が薄いと言わざるを得ないのである。ヘルミオネもまた同様である。劇全体を束ねる役柄として描かれているとは、決して言えない。

ネオプトレモスはヘルミオネ、アンドロマケとそれぞれ近い関係にありながら、じつは近い存在として描かれてはいない。正妻のヘルミオネとはむしろ疎遠の仲である。「あなたが背の君から疎まれているのはわたしの業のせいではない。／共に生活するのにふさわしくないとされているからにすぎません」（205～206行）というアンドロマケの言葉がそのことをよく言い表わしている。一方、アンドロマケも子まで成した仲ながら、ネオプトレモスは主人、そして庇護者以上の存在ではない。ネオプトレモスの留守中メネラオスによって生命を奪われようとしたとき、口をついて出るのはヘクトルの名前である、「おお、わが背の君、あなたの／腕と槍とを、いま援軍に／迎えられたらよいのに、プリアモスの御子よ」（523～525行）と。繋がっているようで繋がっていないこのネオプトレモスと二人の女性との関係が、二人の女性を互いに対立する関係へと導く。争いの原因は元来彼にあるのに、ヘルミオネの怒りは彼には向かわないのである。どうやら作者は、一人のトラジック・ヒーローを作り出すよりは二人の女性の不毛な対立抗争そのものを描くことを目的としたようである。

2. アンチ・スパルタ

ギリシア人の対夷狄意識バルバロイはどのようなものであったろうか。遙かな昔、凡そ前20世紀の頃、中部ヨーロッパからエーゲ海域へ南下して来たギリシア民族は、周囲の異民族との接触のなかで彼我の差をつねに認識せざるを得なかった。前5世紀半ば、歴史家ヘロドトスは、ギリシア人の民族的特性として、法、自由、徳、知の四つを挙げた（『歴史』巻7、102～104節）。これは上に述べた異民族との長い間の接触から結果する彼らの自意識に他ならないが、ことに前5

世紀初頭の二度にわたるペルシア軍の侵攻（前490年、480年）がこれに大きく影響したことは否めない。前5世紀のギリシア人にとって、自らと価値観を異にするバルバロイとはペルシア人に他ならなかった。

いずれにせよ、ギリシア人は自分たちと価値観を異にする異邦人をバルバロイと呼んだ（元の形容詞バルバロスは「鳥の囀りのようにわけのわからない言葉を喋る」の意）が、その特質を象徴するものとして、無法、無知、愚鈍、生硬、無器用、無分別、迷信といった属性が挙げられる¹³⁾。上に挙げた四つの価値観の対極にあるものばかりである。ペルシア軍の二度にわたる侵攻で蒙った災禍と恐怖感、その大国を撃退したことによる自らの政治体制、社会体制に対する自信などが、そこには大きく作用しているであろう。前5世紀アテナイ人の精神の記録簿であるギリシア悲劇の各作品は、自らの伝統的な四つの価値観（先に挙げた法、自由、徳、知）を取り上げて強調すると同時に、それと裏腹にそうしたものを持たない異邦人^{バルバロイ}に対する蔑意をもまた強く描き出している。本篇でもアンドロマケに対するヘルミオネの言辞がそれである。そこでは法概念の欠如を表わすものとして、近親相姦と尊属殺人がことさらに取り上げられていた。作者は、「すべて夷狄の輩はこうしたもの。／父親は娘と、男の子は母親と、／姉妹は兄弟と交わる。この上なく親しい仲の者が／たがいに殺し合う。しかもこういったことを禁じる法律がないのだ」（173～176行）とヘルミオネに言わせている。

しかしそうした無法、無知、また徳に欠けるバルバロイを体現するはずのアンドロマケは、むしろ逆に生粋のギリシア人ヘルミオネと比較して遙かに徳高く知性溢れる人間として登場している。すでに見たとおりである。指弾と非難の対象としてそこに上がっているのは、ヘルミオネ、その父メネラオス、および彼らを生み育てたスパルタという土地であり、その文化そして風習である。

まずヘルミオネに対しては、先に述べたように、その徳の欠如が挙げられる。論争相手のアンドロマケがそれを指摘する。夫を引き付けるものは妻の姿形ではない、徳^{アレチー}なのでであると（207～208行）。同様に分別を持つとも言われる。ヘルミオネの母親ヘレネを例に挙げて、「ふしだらな母親の振舞いを／子供は真似をしてはいけません、分別^{ヌース}があるならば、ね」（230～231行）と、アンドロマケに言わせている。

メネラオスも厳しく糾弾される。アンドロマケが逃がしていた子供を捜し出し、それを人質にしてアンドロマケをテティスの神域から引き出そうとするメネラオスに向けてアンドロマケが言う、「エウロタスの流れ（スパルタの川）のほとりに住むあなた方には、それが賢いやり方ですか」（437行）、「神なるものは神聖で、正義を司るとは思わないのですか」（439行）と。そして子供の命まで取られそうになったアンドロマケは叫ぶ、「おお、人間の誰に対しても敵意を燃やす／スパルタの里人よ、人を欺くことばかり考えている者よ、／嘘の王よ、悪事を企む者よ、話をねじ曲げ、／健全なことには無縁、考えをあれこれいじくりまわす輩よ、／あな

たたちがギリシアに栄えているのは間違いだ」(445～449行)と。バルバロイのアンドロマケにここまで言わせるところに、作者の反スパルタ感情の一端を窺い知ることができると思われる。

さらにペレウスもスパルタ非難に声をあげる、「そなた(メネラオス)はそれでも男か、この卑劣漢め、しかも親譲りじゃ。／男だと考えてもらえるところが、そなたのいったいどこにある？／そなたはプリュギア人風情に妻を奪われたような男だ、／館の部屋に鍵もかけず、召使も付けず留守にして。／この上ない蓮葉女なのに淑女を妻にしたつもりでな。／スパルタの女はな、たとえそう願うても／慎みのある女にはとうていなれぬのじゃ。／彼女らは家を飛び出して、／太腿は丸出し、上着も脱いで、若い男と一緒に／駆け競べや格闘技までする。わしには我慢できぬ／仕業ではあるが。／〈略〉そしてそなたはこんなヘレネのために数多くのギリシアの／人間を集めて、イリオスにまで連れて行ったのか。／そなたは彼女を憎み倒しはしても、槍一本動かすべきではなかったのじゃ」(590～607行)と。浮気妻ヘレネ、コキュのメネラオス、そのために起きた戦争、慎みに欠けるスパルタの女子教育といったものがここにまとめて批判されている。

こうした状況を踏まえて、Kittoはこのスパルタ批判こそ本篇の主要テーマであると主張する。そして3人のスパルタ関係者ヘルミオネ、メネラオス、オレステス¹⁴⁾にそれぞれ傲慢、不実、冷酷という負の特性を担わせる¹⁵⁾。トロイア戦争の原因となった悪女ヘレネはギリシア悲劇の格好の素材で、エウリピデスも取り上げている(たとえば『オレステス』。一方で貞女ヘレネを描いた『ヘレネ』のような作品もあることはある)。メネラオスも好人物に描かれることはまずない。しかし彼らの娘ヘルミオネがここまで痛烈な非難を浴びるのは珍しい。いや個人ではなく、それらを含めたスパルタの地、国風全体が批判の対象とされているところに作者の意図を押し量っても、強ち的はずれではないだろう。Kittoが言うのは当時の、つまりペロポネソス戦争初期の頃のギリシアの政治情勢の反映を見て取ろうということであると思われる。

ここで問題となってくるのは本篇の上演年代である。これがしかし確定されていない。ただし手懸りはある。本篇の445行に付けられたスコリア(古注)の中に、「この劇はペロポネソス戦争初期の頃(エン・アルカイス)に書かれたと思われる」という一節があるのである。ペロポネソス戦争は前431年に始まり前404年に終わった内戦である。その初期の頃(エン・アルカイス)というのは、27年に及ぶ戦争継続期間のどの辺りを考えたらよいか。5年あるいは10年経過した頃だろうか。取りあえずはおおまかに前420年代一杯まで考慮してよかろうか。

いま一つ年代設定の手懸りとなるのは劇の文章の韻律の問題、すなわちアイアンビック(短長格)のレゾルーション(音節分裂)の比率の増大現象である。エウリピデス劇の文章は、時代が進むにつれてアイアンビックの長音節を短音二つで代用する(これを音節分裂と称する)

傾向が強まる。たとえば『ヒッポリュトス』ではその比率は5.8%であるが、『アンドロマケ』では12%、『嘆願する女たち』では14.2%、『ヘカベ』では14.7%となる。時代配列は数字通りと言い切ることはできないが、一つの傾向は見て取れそうである。『ヒッポリュトス』（前428年上演）以外いずれの作品も上演年代は不定であるが、少くとも前428年以降であるらしいということである。

内戦中スパルタはアテナイの宿敵であり続けた。その関係は前420年代だけに限ったことではない。しかし開戦直後の昂揚した敵対感情が未だ継続されている間、それが作品に反映されることはありそうな話ではある。Kitto が本篇に反スパルタ感情を読み込もうとするその姿勢は、けっして理解できないことではない。

それとの関連で言えば、本篇におけるアルゴスに関する記述も無視できない。732行以下に次のような一節がある。「さあ、——遊んでいる暇などないのだ——／我が家へ帰るとしよう。スパルタの近所に国が／あるのだ、さる国が。以前は友好関係にあったのだが、／いまは敵国になっているというのが。そこへ兵を進め、／侵攻してこれをわが傘下に置こうというのが。／その件が思いどおりに片付いたら／戻って来よう」（732～738行）。

ペレウスの迫力に押されたメネラオスが、ヘルミオネを残したままプティアを去る際の捨てぜりふである。この「さる国」はアルゴスと想定されている¹⁶⁾。アルゴスは地理的にもアテナイとスパルタ両国の中間に位置し、ペロポネソス戦争全体の中でも軍事的にその帰趨が注目されていた地域であった。本篇と同様に内戦開始直後に上演されたと目されているエウリピデス『ヘラクレスの子ら』¹⁷⁾の末尾には、アテナイ軍に破れたアルゴス軍のエウリュステウス王が死を免除された感謝と報恩の辞を述べる条がある（1026行以下）。ここに当時のアテナイとアルゴスの政治的関係の反映を見ることは不可能ではない。ただ Kitto 説は、あまりにも政治的側面を強調しすぎるとする反論もあることを付け加えておかねばならない¹⁸⁾。

3. 家と国家

Storey は、本稿冒頭で触れたように、この劇を婚姻関係の破綻という現象に視点を置いて解釈しようとしている。これは非常に興味深い着眼点だと思われる。プティアのネオプトレモス家の正妻はヘルミオネである。そこにネオプトレモス自身がトロイアから連れ帰ったアンドロマケが第二夫人として入り込む。夫婦関係に罅^{ひび}が入る。しかも正妻に子がなく、第二夫人に子供ができる。子供の有無は家督の相続に関係する。夫婦仲は冷え、妻妾二人のあいだには軋轢と闘争が生じる。家庭内は不和となる。元来目出たかるべき婚姻、正式な男女の結びつきが不幸を生み出す。第2スタンモンで合唱隊が歌う。

家庭の悲劇

人の世に婚姻の床が二つあることを、わたしは決して誉めはしない。

腹違いの兄弟のいることも、

それが因^{もと}で起きる家うちの争いも、苦悩に満ちたいがみ合いも。

わたしは、結婚で結ばれた夫が他の女を入れぬ

一つ床で満足してくれたら、

それでよい。

(465～470行)

一般論化しているが、これはネオプトレモス批判である。アンドロマケという存在がなくてもヘルミオネは良妻ではなかったかもしれないが、ネオプトレモスはアンドロマケを家庭内に入れることによって家庭環境をことさらに悪化させた。アンドロマケは自らの体験を挙げて、たとえ夫に自分以外の女性ができようとも妻としての徳を行使することで夫の心を引き留め、振り向かせることは可能だと言うが(207～208行)、我儘に育った一人娘のヘルミオネには無理な要求であろう。この婦徳の称揚は当時の男尊女卑の社会風潮を端的に反映するものと言える。

ネオプトレモスとヘルミオネの不幸な結婚、その不幸な結婚から導き出された悲劇は、このあともペレウスの口を借りて言及される。

おお結婚よ、結婚よ、そなたがわが一門と、

この国とを滅ぼした。アイアイ、

エエ、おお吾子よ、

わが一門が世継と家の存続とを願って、

そなたとヘルミオネとの呪われた結婚を

取り結ぶことのなければよかったものを。

それはそなたには死をもたらすものだった、吾子よ、

いや、その前にあの娘が雷火で滅ぼされていればよかったのだ。

(1186～1193行)

婚姻関係をめぐる家庭のいざごさは、その家庭を破壊するだけではない。その家が一国を統べる家柄であれば、累は国全体に及ぶ。結婚がわが一門とこの国を滅ぼしたというペレウスの述懐は、まずはヘルミオネと結託したオレステスの謀略で命を落したわが子ネオプトレモスを追悼するものであるが、そのネオプトレモスの死とそれに先立つ妻ヘルミオネの離反はプティアにおけるペレウス以来の王家の家庭崩壊ひいては王統の断絶を意味している。一家庭の不和が多くて民草を不幸に陥れる。しかしまた国の不幸が一家庭に及ぶのも自明のところである。トロイア戦争はトロイア王家を破滅させたが、その余波は勝利者ギリシアにも及んだ。ギリシ

アの多くの将兵が命を落してトロイアの塵泥に身を沈めただけではない。凱旋將軍アガメムノンは妻クリュタイメストラの背信とカッサンドラを第二夫人として連れ帰ったことが災いして殺され、のちのちの一家に多大な悲劇を生み出すことになった。ネオプトレモスも同様である。トロイア戦争の戦利品としてアンドロマケを獲得し、これを故郷へ連れ帰って寝間の相手に加えた。そのことが家庭不和を招き、王統断絶に至る悲劇的事件を出来せしめたのである。

またヘルミオネは、もしトロイア戦争が起きなければオレステスと結婚することになっていた。アガメムノンは息子オレステスとヘルミオネの婚約を承認していながら、トロイア攻略にはネオプトレモスの協力が必要である（ヘレノスの予言）ことから心変わりして、戦後その功に報いるためにヘルミオネをネオプトレモスに与えたという経緯がある。「というのは、あなたはわたしの許嫁だった。父上の企みでこの男と一緒にいる前はね。父上はトロイアの地へ出征する前に、あなたをわたしに呉れると言っておきながら、あとになっていまのご亭主に与えたのだ、トロイアを陥したらという条件付きで¹⁹⁾」(966～970行)とオレステスが言うのがそれである。因果はめぐり、許嫁を取られた男オレステスが取った男ネオプトレモスを死に至らしめることになる。これまた戦争という外部の事件が家庭内に入り込み、婚姻関係に軋轢葛藤を来し、また別の婚姻関係を破壊するという例である。ネオプトレモスもヘルミオネもアンドロマケもオレステスも、それぞれが被害者でもあり加害者でもある。家庭内の不和と家庭外のそれ（本篇の場合はトロイア戦争）とは相互に関連し影響し合っている。双方が互いに因果の関係にある。Storeyの言うとおり、家庭の不和は争いと殺戮を生み出す。²⁰⁾だがまた争いと殺戮の最たるものであったトロイア戦争がネオプトレモス家に不和と軋轢、そして死と崩壊をもたらしたのである。そしてトロイア戦争がまたオレステスとヘルミオネの許婚という関係も断絶せしめたのである。この家庭内外の不和の相互作用は留意するに値する。繰り返せば、元来トロイア戦争はメネラオス家の不和、すなわちメネラオスとヘレネの夫婦関係がパリスの介入によって破れたことに端を発したのであった。そのトロイア戦争が生み出したアンドロマケという戦利品の介入によって今度はネオプトレモスとヘルミオネの夫婦関係が破綻する、ということである。『アンドロマケ』はアンドロマケと題を付けられているけれども、アンドロマケだけを描くのではない。アンドロマケをめぐるネオプトレモス家の家庭内不和を、そしてその結果としての当主の死と一家離散を描くのである。

4. 家庭の悲劇

『アンドロマケ』とほぼ同じ素材を使用したと推定される作品にソポクレスの『ヘルミオネ』がある。ただしこれは極小断片一片を²¹⁾残して散佚した。ただエウスタティオス（12世紀後半のテッサロニキ大司教）の『オデュッセイア注解』1479.10にその梗概が載っている。凡そ

以下のような内容である。

メネラオスがトロイアへ出征中、義父のテュンダレオス（ヘレネの父）はヘルミオネをオレステスと娶わせた。のちメネラオスはオレステスから娘を取り上げて、トロイアでの約束どおりネオプトレモスに与えた。ところがネオプトレモスは父アキレウスの死をめぐる疑義を正そうとしてデルポイに赴くも、アポロンの神官マカイレウスに殺されてしまう。ヘルミオネは再びオレステスの手に戻され、二人のあいだにはティサメノスという子供が生まれた——というものである。

この話にアンドロマケはどう関わっているのか、これだけではわからない。伝承ではアンドロマケはネオプトレモスの戦利品^{グラス}となってプティアの地へ連れて来られたからヘルミオネとも顔を合わせているはずであるが、どうやらソポクレスはエウリピデスのように妻妾対立というかたちで劇を作らなかったように見える。もし二人が絡む場面があったとしても、作意はあくまでヘルミオネの側に沿ったものであったろう。題名からも全篇はヘルミオネの劇であったと推測できる。

一方、エウリピデスは同じ素材を用いて『アンドロマケ』を書いた。その内容は上に見てきたとおりである。ネオプトレモスとヘルミオネの婚姻関係に絡む軋轢と葛藤を、一方は正妻ヘルミオネを主人公として（おそらく）描き、他方は奴隸身分で第二夫人のアンドロマケを主人公として描いた。後者エウリピデスの作品は、題名からするとアンドロマケが主人公であると言えることができる。しかし先に触れたように、彼女は劇の途中で姿を消す（1047行以下劇の最後までは「だんまり」として舞台上にいると想定できないことはない）。その姿は劇の事件に最後まで主体的にかかわるものとは言い難い。

ヘルミオネも同様である。1008行（劇の3/4の部分）で舞台を去り、悲劇の場から身を引いてしまう。彼女らの他にも結婚生活の被害者、あるいは婚姻関係に躓いた者はいる。たとえばメディアやデアネイラがそうである。彼女らはそこに出来た悲劇的事件の当事者でありつつ、その事件を生き抜くことで悲劇的人間ともなり得た。いまヘルミオネもアンドロマケも婚姻関係にまつわる不幸な状況に連座しながら、その不幸をその身に一手に引き受けて悲劇的人物となる途を取らない。アンドロマケは知も徳も兼ね備えた女性として描かれている。しかし彼女は我が身の置かれた不幸な状況を嘆くだけで、何ら行動を起こさない。卓れた人間が不幸な状況に負けて、端から見れば愚行としか言いようのない行動を起こす。それが悲劇と悲劇的人間を作り出す。メディアもデアネイラもそうである。アンドロマケはたとえ愚行であれ、行動を起こすことはしない。不幸な状況を嘆いているだけの哀れな存在でしかない。ヘルミオネは愚行を犯す。しかし彼女には徳と知が欠けている。彼女には己の思惟と行動との懸隔を感知する能力がない。端から悲劇的人物たることを放棄している。どうやら作者は個人の悲劇を描くこと、言い換えれば悲劇的人物を造形する意図はなかったように思われる。

では何を描こうとしたのか。すでに述べてきたように、家庭内の不和軋轢、婚姻関係の不具合から生じる不幸な状況、それこそ作者の執筆の目的であったと思われる。二人の男女が婚姻関係を結ぶとき、それぞれが背後に抱えているそれまでの生活、過去の人生経験が新しい二人の生活に影を落すことは必定である。ネオプトレモスとヘルミオネはそれぞれの過去を背負って婚姻関係を結ぶ。ヘルミオネは、その背後に婚約者だったオレステスの影を引き摺っている。アンドロマケはネオプトレモスの背後に存在する影ではなく現身の姿となって、ネオプトレモス・ヘルミオネ夫婦のあいだに割り込んでくる。かくして出来上がった新しい結婚生活は、新婦ヘルミオネの我儘に加えて嫡子の欠如からほころびを見せる。いつの世にも、またどこの世界にもある家庭内不和が出来する。

こうした婚姻関係をめぐる不和軋轢が作劇の重要なテーマであったらしいことは、ネオプトレモスの死にオレステスを関与させたことから見てとれる。伝承ではネオプトレモスはデルポイの神官マカイレウスによって殺されたことになっている。ソポクレスの『ヘルミオネ』はこの伝承を忠実に踏まえている。しかし本篇ではオレステスの策略に踊らされたデルポイ市民がネオプトレモスを虐殺する（Stevens はこれをエウリピデスの創作であると言う²²⁾）。ネオプトレモスは一人の女性をめぐる二人の男性の暗闘の一方の当事者であり、被害者、敗者ということになる。それは婚姻関係のもつれによる悲劇とすることができる。デルポイ市民を煽動するオレステスを描き出すことによって、一組の男女の婚姻関係のもつれがいっそう強く映し出されることになるのである。

本篇の題名は『アンドロマケ』である。しかしこれはアンドロマケの劇ではない。アンドロマケはトラジック・ヒーローにはなり得ていない。それもあってか Kitto はこの劇のもつ政治的、時事的側面、すなわち反スパルタ感情を強調した。わたしたちはしかしそれを認めながらも、全面的に与することはできなかつた。やはりこれは日常的な家庭の不和を中心に据えて描いた劇なのである。Conacher は Hartung の説に同意して、本篇はアンドロマケの不幸ではなくベレウス家の不幸を描いた作品であるとしている²³⁾。ただベレウス家の不幸とだけ言って済ますのは皮相的にすぎるだろう。Storey の言うように、その悲劇を誘因する婚姻関係、それも一組だけのそれではなく複数の婚姻関係の錯綜に由来する家庭内悲劇という捉え方が大切だろう。先の Conacher も本篇にはトラジック・ヒーローが存在しないことを認めている。作者はアンドロマケもヘルミオネもトラジック・ヒーローとせず、彼女らの婚姻関係から結果する家庭内の不幸を描いた。個人の悲劇ではなく、婚姻関係を基本とする家庭という日常世界に出来る悲劇を描いたのである。

しかしここへ来てわたしたちは思い至る、作者はネオプトレモス家の悲劇を描きながら、ネオプトレモス家の悲劇を書いているのではないと。それは単にA氏の家庭、あるいはB氏の家庭の悲劇を描いているのであると。そこではトロイア戦争もスパルタも、さほど考慮の内に入

れる必要はないのであると。そこに描かれているのは作者の周囲で起きていた当時のアテナイ市民の家庭の不幸、そしてまた現代のわたしたちの周囲でもしばしば見かける婚姻関係のもつれに由来する家庭悲劇なのである。

註

- 1) あとの9篇は『ヘカベ』、『オレステス』、『フェニキアの女』、『ヒッポリュトス』、『メデア』、『アルケステイス』、『レーソス』、『トロイアの女』、『パッコスの信女』。この10作品は学校の教科書用にでも編纂されたものであろうか。
- 2) Cf. H. D. F. Kitto, *Greek Tragedy. A Literary Study*, New York, 1961 (1954).
- 3) Cf. P. T. Stevens, *Euripides Andromache*, Oxford, 2001 (1971).
- 4) Cf. A. Garzya, Il mito nell' «Andromaca» di Euripide, *Dioniso* 15 (1952), p.104~121.
- 5) Cf. H. Erbse, Euripides' Andromache, *Hermes* 94 (1966), S.276~297.
- 6) Cf. D. J. Conacher, *Euripidean Drama*, Univ. of Toronto Press, 1967, p.173.
- 7) Cf. I. C. Storey, Domestic disharmony in Euripides' Andromache, In: *Greek Tragedy* (ed. by I. McAuslan & P. Walcot), Oxford U. P., 1993.
- 8) ギリシア中部テッサリア地方南東部の町。ペレウス以来一族の故郷である。
- 9) Cf. Stevens, *op. cit.*, p.7.
- 10) Storeyはこの劇を解釈するキーワードとして、婚姻、結婚、家、ベッド、夫を挙げ、劇全体を家庭内不和の悲劇として捉える。Cf. *op. cit.*, p.180, 181, 187.
- 11) Cf. T. B. L. Webster, *The Tragedies of Euripides*, Methuen, 1967, p.118.
- 12) 但しエクトスに「だんまり」となって、ペレウスともども子供連れで登場した可能性はある。デウス・エクス・マキナとして顕現するテティスはその名を口にする(1243行)が、そのとき舞台上に存在していたはずだと推量できるからである。Cf. Stevens, *op. cit.*, p.11. そうすると劇全体を通してほぼ登場することになり、題名にふさわしい存在となる。但しそれが真の意味でのトラジック・ヒーロー(ヒロイン)であるか否かは、また別の問題である。
- 13) Cf. J. Jüthner, *Hellenen und Barbaren*, Das Erbe der Alten, Leipzig, Heft 8, 1923.
- 14) オレステスはアルゴスの人間であるが、作中ではスパルタの与党的存在(ヘルミオネの従兄であり、またかつては婚約者でもあった)として登場している。
- 15) Cf. *op. cit.*, p.228.
- 16) Pageはこの箇所を前420年のアルゴス・スパルタ平和条約交渉と関連するものと捉えている。しかしそうなる上演年代はずいぶん分下がることになる。Cf. D. L. Page, *The Elegiacs in Euripides' Andromache*, In: *Greek Poetry and Life*, Oxford, 1936, p.223ff.
- 17) 『メデア』以後『ヒッポリュトス』前後とする説(Ceadel)、前430年のスパルタの第2次アッティ

カ侵攻直前とする説 (Zunz)、前430～427年とする説 (Wilamowitz) などがある。

- 18) たとえば Conacher, *op. cit.*, p.171. ギリシア悲劇の各作品は前5世紀アテナイ市民の精神の記録簿であるとするならば、その作品が時代の思潮と没交渉であるとはとうてい考えられない。先に挙げた『ヘラクレスの子ら』は嘆願劇というジャンルに入る作品である。亡命生活を余儀なくさせられているヘラクレスの子らからの嘆願を受け入れるのはアテナイである。同工の嘆願劇『嘆願する女たち』でもそうである。作者はこうした作品を上演することによって、現実の世界でも祖国アテナイの人道的寛容さと弱者救済を可能にする国力の充実を国内外にアピールしようとしたのである。拙稿「愛国の歌——エウリピデス『ヘラクレスの子ら』考——」『研究論集』第88号、関西外国語大学、2008年9月、123～134ページ参照。
- 19) トロイアのヘレノスの予言では、トロイア攻略にはネオプトレモスの参戦とヘラクレスの弓が必須条件であった。参戦したネオプトレモスは、ヘラクレスの弓を持つピロクテテスの参戦を促すためにオデュッセウスらと同道してピロクテテスの説得に努めた。
- 20) Cf. *op. cit.*, p.187.
- 21) 「だが、ああ、道のかよう祖国の大地よ」(断片202、ビザンティンのステパノスに抛る。下田立行訳、岩波版ギリシア悲劇全集第11巻、75ページ)
- 22) Cf. *op. cit.*, p.5
- 23) Cf. *op. cit.*, p.173, Cf. I. A. Hartung, *Euripides Restitutus*, 2 vols, Hamburg, 1844 (筆者未見)

(たんげ・かずひこ 外国語学部教授)